「実装」と共に 40 年

宮代 文夫 *

Forty Year's Memorial in Jisso

Fumio MIYASHIRO*

* よこはま高度実装技術コンソーシアム (〒 240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-5 横浜国立大学内)

* Yokohama Jisso Consortium (79-5 Tokiwa-dai, Hodogaya-ku, Yokohama 240-8501)

1. はじめに

「JIEP 創立 20 周年おめでとう！」といたいところであるが、本当は「実質 40 周年おめでとう」というべきであろうか。日本の実装技術の歴史は厳密に遡れば 50 周年、といっても差支えないであろう。ともかく最年長に近い私が実装分野の活動を始めたのが 1980 年前後であるから、ざっと 40 年と申し上げるわけである。克明に長々と掘り起こすと読者の皆様が辟易とされるであろうから、本稿では SHM 時代、IMAPS での Japanese Session 活動、それに ICEP-IAAC の発足、の 3 つに絞ってそれぞれの回想をしてみたい。

2. SHM 時代

1980 年代～1990 年代は日本の産業の黄金時代で、毎年右肩上がり、企業も「投資をすれば必ず報いられる」というよき時代で、このころの経営者は今に比べ随分経営が楽だったであろうと思う。しかし技術者も含めやや傲慢で「Japan is as No. 1」などという本がベストセラーになり、欧米の経済学者が「日本企業の強みはどこにあるのか」を真剣に追求し、「コア・コンピタンス経営」なる「企業の強み」論がにぎやかになった。昨今の状況では日本の中企業がこれを紐解いたりしている状況である。

さてこのころは阪大の菅田先生が会長で、傳田さん、二瓶さん、立川さん、池上さん、などと「ハイブリッドとモノリシックはどちらが勝つか」など、今思うと解のないような議論を熱心に行っていた記憶がある。初の国際会議を新宿の京王プラザ H で開催した記憶は結構鮮明に残っている。

この SHM と回路基板陣営が合併して JIEP が誕生したわけであり、その際もいろいろな意見が錯綜してなかなかすんなりといかなかったが、現在の JIEP が、広範にわたり深い掘り下げをし、日本の実装技術の先端を走っている研究会活動を見るにつけ、つくづく合併してよかった、と思う昨今である。最近天寿を全うされた佐々木 正氏のご薫陶も忘れ難い思い出である。

3. IMAPS での Japanese Session

IMAPS はアメリカに本拠を置き、ヨーロッパ、アジアに拠点を置く、実装技術の世界的組織である。アメリカでは毎年秋に集大成の学会が開かれている。当然日本からも投稿が多く、採択率も高かったが、アメリカ側から「論文の質はよいのだが、Q&A で立ち往生されるのは困る。いっそ「完全同時通訳セッション」にしてくれないか？」という強い要請があった。当時のわれわれとしては「インド人やロシア人の発音だってひどいじゃないか、我慢して聞いたら？」などと思ったが、まずトライしよう、ということで、Seattle で傳田さんが座長で私を含め 5 人が発表する形で試みた。この J. S. は、準備する方も、本番は楽だが、準備が大変で、Topics を決め、その専門家を 5、6 人選び、そのころの通訳の Ostermann さん、と入念な打合せをし、Q&A のリハーサルも行って備えた。これは大変好評で、並行の他のセッションはガラガラでこの Japanese Session だけ満杯、という事態となった。

アメリカ側は喜んで、これを機に毎年やろう、ということに決まってしまった。まさかこれを 17 年も担当することになるうとは夢にも思わなかった。アメリカでは IMAPS の秋の学会はいろいろな都市で開催される。したがって出張

図 1. 1991 年の Japanese Session のメンバー

図 2. 2001 年の IMAPS の予稿集

などではなかなか行けない Seattle, Minneapolis, Denver, Philadelphia, Baltimore などとも訪問でき、楽しかった。何といても印象深かったのは、例の 9.11 の New York テロが起った 2001 年の 10 月に Baltimore で行われた J.S. である。当然夏には 5 名の発表者も決まっていたのだが、5 社全部が「出張拒否」ということになった。私は J. S. の Chairperson としてともかく行った。Washington DC 行きの ANA ジャンボ機（500 人乗り）にたった数人の乗客のみで、搭乗員の方が多かった。さて、着いて学会役員と話す「ヨーロッパ勢は全部来ている。日本はどうしたんだ。ともかく穴が開くのは困る」というわけで、当時アメリカ側の通訳（Ken Levin 氏）とほぼ徹夜状態で 5 人分の論文の読み合わせをし、「私が 5 人分代読、それを同時通訳する。質問は受けない」という約束で本番を行った。穴を開けないで済んだし、その夜のレセプションではおほめをいただいたが、冷汗モノであった。

その後、嶋田さん、岡本さんなどにも代わっていただきながら 20 回ばかりで終わり、となった。この間、私も Sidney Stein 賞という国際協力関連の賞をいただいたり、フェローに推挙していただいたり、よいこともあったが苦勞も多かった。

4. ICEP-IAAC, アジアを周回して開催する国際学会の創設

これはもう数年以上前になるが、一緒にフェローになった Bokil 氏（当時 IMAPS の幹部）から、いきなりメールで「アジアで実装 Conference を行いたい。場所は北京としたい。日本は同意するか？」ときた。これには正直カチンときたが、中国とも合意が取れている風だったし、正直言ってわれわれもアジアでの学会開催には不熱心だったので、数人の方と相談した結果、まあ第 1 回は仕方がないか、ということで不承不承同意した。ところが中国の上層部では「学会はすでにある（IEEE）ものしか認めない。新しい学会は認めない」という判断が下り、中国で開けないのはおろか、IMAPS の中国会員も認めない、となってしまった。そこで今まで J. S. で懇意となったアメリカの方々にメール

図 3

を配信して、この件についてのメール議論を行った。そして「日本としてもアジアでの展開は重要課題である。中国があのような方針ならば、いっそ日本、韓国、台湾の三カ国が順番に主催して回り持ちで行ってはどうか？」と提案し、これが受け入れられて ICEP-IAAC という国際学会が誕生し、今年無事日本（三重・桑名）で 3 巡目の開催（上記ポスター参照）が終了し、ホッと胸をなでおろしているところである。本当は中国はもちろん、シンガポール、マレーシア、インドなども主催国に手を挙げてくれれば、と思っているのだが。続きの展開は若手メンバーに期待したい。

5. 終りに

アジアの結束、という点ではまだまだ日本は貢献不足である。今やエレクトロニクス産業の拠点はアジアであることは明らかであるのだから、日本は少なくとも「実装の R&D の拠点」としての存在感を確立して欲しい。IAAC の巡回開催で多少は増えてきたと思うが、アジア各国に友人を作って欲しいと思う。

もう一つの提案は「実装技術ロードマップ」を JIEP が編纂する形で毎年発表してもらいたいと思っている。これは何年も歴代の会長・幹部には訴えてきた。研究会のカバー範囲の広さと新規トピックスの取り上げ方を見てみると、Fraunhofer などより上を行っているのではないかと、という観もある。私が技術委員長の時一回だけ（2000 年）に試みたこともある。半導体のロードマップもなくなって淋しい。JIEP の今後の躍進を心から祈っている。

（2018.7.10- 受理）

著者紹介

宮代 文夫（みやしろ ふみお）
1962 年 3 月、東北大学工学部通信工学科卒業。同年（株）東芝へ入社。以後主として総合研究所にて、マイクロ波電子管（進行波管）、SAW デバイス、ハイブリッド機能回路などの研究開発に従事。東芝ケミカル（株）・6 年間勤務を経て退職後はシンガポールの IME のアドバイザーを務め、その後は JIEP および現行機関を中心に実装技術の普及・啓蒙活動を行っている。